ISSN 1344-5561

京都府立大学図書館報

なからぎ

１８１号

２００７年10月

『資本論』の発達論読み

福祉社会学部長　小　沢　修　司

マルクスの『資本論』といえば、その名前は多くの方が知っているでしょう。もしかしたら手にとって読まれた方がおられるかもしれません。資本主義経済の発展が貧富の差を生みだすこと、そして貧困にあえぐ労働者や国民の苦悩の源泉を明らかにすることを通じて、資本主義の崩壊と社会主義の到来を予言した書と思われている方がほとんどではないでしょうか。

そうした理解は間違いとはいえません。ですがそれだけのものではないのです。私にとっては、人間発達の合法則性を明らかにしてくれている書として存在しています。『資本論』の発達論読み、これが私の研究者としての出発であり、現在の私を支えてくれています。

「序言」でマルクス自身が語っています。「今日の支配階級は、‥‥彼ら自身の利害関係によって、労働者階級の発達をさまたげるいっさいの、法律によって処理できる諸障害を取りのぞくことを命じられている。」

このことを明らかにするために、マルクスは工場法の歴史、内容、成果について詳細に記述しました。第１巻第８章「労働日」、そして第13章「機械と大工業」です。1300ページを超える大部な書（第１巻）のなかで約３割を占めています。ところが、これらの章は「歴史的諸章」と一括されて理論的な章とは区別され、そうでなくても「難解」な『資本論』と格闘するわけですから、省くことのできる箇所はできるだけ読み飛ばすということか、十分に読まれないのが常でした。「解説書」もそのような扱いです。

ところが、これらの章が実に面白いのです。資本主義の経済発展がどのようにして人間の発達を準備してくれるのかを教えてくれています。ですから、私の薦める『資本論』第１巻の読み方は、「序言」（各版への）に始まり、第８章「労働日」の次は第11章「協業」、第12章「分業とマニュファクチュア」、第13章「機械と大工業」へと進み、第24章「いわゆる本源的蓄積」に至るということになります。

「人間発達」というと教育学や心理学の専売特許と理解されがちですが、私は「人間発達の経済学」にこだわり続けてきました。これからもそうするつもりです。「すべての人に所得の保障を」という一見不可解なベーシック・インカムの主張（これから多くの関心を集めることになります）も、私にとっては『資本論』の発達論読みが支えてくれています。

（おざわ　しゅうじ：福祉社会学部教授）

ご紹介の「資本論」は、２階閲覧室入口の新着図書コーナーに配架しておりますのでご利用ください。なお、英語版、ドイツ語版もあります。

研究者としての図書館との関わり

図書館運営委員　織　田　昌　幸

かれこれ20年近く前の話になるが、私が大学の研究室に入ったころ、ご多分にもれず研究室の先輩から実験方法などを学び、研究の面白さも良くわからず、実験室を動き回る生活が始まった。当時は良くも悪くも、師事する先生から具体的に何かを教えてもらうという雰囲気ではなく、むしろ考え方や着眼点を「見たり聞いたりして学べ」といった感じであった。そんな日々の研究室生活の中で、先生や上回生にあたる大学院生が図書室にこもって何かを調べている場面を良く目にしていた。今にして思えばごく当たり前のことなのだが、「研究する」ためには単に実験作業を行うだけではなく、これまでの研究事例を知った上で何をすべきか立案することや、研究成果をまとめて学術誌に投稿することが必要で、図書室通いは研究生活の１コマであった。これらの作業は新米からは想像できないほど膨大になるわけで、さらに当時は便利な検索システムなどもなく、地道に図書室に通って毎週届く学術誌に目を通す、という作業をこなさなければならなかった。恥をさらすようだが、当時の私は定期的に研究室で行われる論文紹介（国際誌掲載の学術論文の内容紹介）のための論文を探す程度にしか図書室に通っておらず、自分で論文を書くなどという高尚な作業は、先生や一部の大学院生に限られたものだという、ある意味、自身とは別世界の出来事のようにとらえていた感がある。言われたことを実験して結果を出し、単純にその過程に満足するという、単なる手作業が好きな学生であったような気がする。

大学院修士課程修了後に、ある民間企業の研究員として就職した。前述のように、それほど「研究する」ことに高い志も持たずに就職したわけだが、ここで配属早々、衝撃的な事実に遭遇する。当時その研究所では、研究に携わる社員は研究職と技能職とに区分化されており、研究職では新入社員といえども、自分の研究テーマを立案することを求められた。こうなると嫌でも図書室にこもって調べ物をしなければならない。ただし会社員である以上、通常勤務時間内は実験作業をすることで、与えられた課題に対する結果を求められる。当然のことながら、机に座って調べ物をするという作業は勤務時間外にのみ許されていた。また研究者間での情報交換、すなわち論文紹介も勤務時間後に定期的に行われていたが、諸先輩の担当時は質・量ともに相当なもので、暗黙のうちに「これだけやらないと」ということを教えられていたような気がする。見方を変えると、少なくとも当時の研究所では、自身でテーマ提案する自由があり、さらにそれで結果が出れば、学会での発表や論文を投稿する自由も与えられていた。研究職員は一定量の会社業務をこなしながら、業務時間外に論文を書き、ある意味そのご褒美として大学から論文博士の称号を授与されていた。今にして思えば、これらが各人の研究に対するモチベーションを高め、企業研究の質や効率も高めていたような気がする。知人からの情報ではあるが、最近の企業

研究は様変わりし、論文や学会発表など、特許以外で成果を外部発表することを差し控えさせられる方向にあるとか。当時の上司から、自身の成果を学会発表するにあたり、「うちの研究レベルの高さを宣伝して来い」と言われたことが、懐かしく思い起こされる。

周知のように、最近の学術雑誌は、紙媒体の印刷物から、インターネット上で閲覧できる電子ジャーナルへと変わってきている。以前のように、図書館に出向き、学術雑誌を机上いっぱいに広げて調べ物をする形態から、自身のパソコン画面上で、論文ファイルの記事をスクロールしながら調べる形態に変わってきた。また既報の論文調査においても、検索サイトでキーワードなどを入力すれば、たちどころに結果が返ってくる。科学の進展にあわせて蓄積される情報量も膨大となり、また新たな知見も次々と報告される現実を踏まえると、こうしたインターネットの活用無くしては対処できない状況と言えよう。この一般状況を本学の現状に照らし合わせると、少々残念な現実が見えてくる。研究室の学生から「〇〇論文のダウンロードができないのですけれど」という声をしばしば耳にする。こうした場合「図書館に文献複写を依頼して」となるわけだが、昨今の常識からすると、読みたい時にパソコン上で論文を読めることが普通であり、何日か待ってコピーを受け取ることには、どうしても不便さを感じてしまう。現実問題として、他の研究設備同様、国内の大学間でも格差が生じているのは紛れもない事実である。研究は適当に教育重視で、という発想があるのかもしれないが、少なくとも私が関与する分野においては、最先端の研究を志向しない教育というのはありえない。昨今の世間常識に照らし合わせ、本学でも真剣に考えていかなければならない問題であろう。

大学教員になって８年余りが経過するが、一研究者として、学生諸君には、つくづく「研究の面白さ」を実感してほしいと思う。ただしその面白さを実感するためには、多分想像以上の努力が必要なわけで、何をすべきかは、結局自分で気付かなければならないように思う。こと大学院生には「なぜ進学したか」を常々考えてほしい。私自身の学生時代を反面教師に敢えて申し上げると、「立案」「実行」「成果発表」の一連の作業をこなせて初めて、研究が「面白そう」ではなく、「面白い」と実感できるようになる。そのためにはいろいろな勉強をしなければならないし、図書館に通って調べ物もしなければならない。多くの文献を読むうちに、必然的に文章表現力も向上し、自身で英語の論文も書けるようになる。逆説的な言い方になるが、そうした努力ができない人は、早めに研究者への道を諦めたほうが建設的かもしれない。あくまで私見だが、高校までに少し理科や数学の成績が良くても、必ずしも研究者に向いているとは限らない。また研究者に向いていないからといって、その人の可能性を否定するわけでは全くなく、他に向いている分野があるのかもしれない。そういった意味では、学生諸君には大学入学時から、幅広い分野の書籍を読んで学び、また理系・文系などの枠を超えて、異分野の人たちとの交流を深めてほしい。本学に赴任して４年余りになるが、本学の小ささは、こうした面では極めて魅力的であるように思う。学生と教員の間の距離も他大学に比べて驚くほど近く、学生の立場からすると、この距離感を大いに活用して、せっかくの大学生活を充実したものにしてほしい。

（おだ　まさゆき　農学研究科講師）

附属図書館運営委員会等開催報告

６月６日開催の平成19年度第１回の附属図書館運営委員会で選書、電子ジャーナル、及び附属図書館のこれからのあり方を検討する３つのワーキンググループ委員が選出されました。特に本年度は、昨年度までの自己評価ワーキングから、自己評価・あり方ワーキングへと改称し、附属図書館のこれからのあり方を検討していただくことになりました。

大学図書館は、学術情報流通の激変に伴う情報化整備と電子図書館的機能など、今日的な教育課題や研究課題にもこたえていく役割と機能が求められています。そうしたなかで、府立大学附属図書館も、目録の一部電子化、電子ジャーナルの導入、選書方針の確定などの課題にこたえてきましたが、今日的な大学図書館としてはさらなる充実が求められるところです。一方、京都府立大学としては、大学改革、三大学連携、法人化、学部再編や施設老朽化のなかで、施設をどうしていくかということが検討されています。附属図書館は、施設の狭隘化、老朽化という物理的な問題をも抱えています。

７月10日の第１回目の自己評価・あり方ワーキングでは、図書館施設がどうあるべきかが検討されました。地域貢献・府民サービスをどのように位置づけ施設案に生かすかが検討されるべきこと。３大学連携との関連からの利用者数に対応する施設であること、電子図書館機能にどう対応していくか、という観点が必要であること。さらに、アメニティ空間をどうするかという大学全体の構想との関連も問題となることなどが討議されました。また、電子ジャーナルの拡大や、大学自体の研究成果の電子化・データの発注といった機関デポジトリの推進など、電子図書館機能にどう対応するかが今日の大学図書館として大きな課題であることなどの意見が出されました。

規模としては、現在は約2500㎡の施設ですが、少なくとも倍の面積は必要であろうとの提案がなされました。しかし、研究室資料の受入をどうするかによって必要な面積は変わってきますし、図書館がアメニティ空間を有するかどうかも規模に関わる問題となります。施設としては、長期の見通しを持つ必要があります。

ワーキングでは、図書館の充実はすぐれた大学の象徴であることや、維持管理には組織・ソフト面での裏付けが不可欠であること、など基礎づくりの必要性も確認されました。

大学図書館は、「教育・学習支援機能」及び「研究支援機能」の二つの機能を果たさなければなりません。今後府立大学の改革基本計画の推進や、大学全体の施設計画の進行とも関連しながら、こうした大学図書館としての基本的な命題を踏まえ、府立大学図書館としてどうあるべきかを検討いただくことになります。

蔵書整理報告

８月13日㈪～８月31日㈮の間、２階閲覧室を休室して蔵書点検を行いました。点検結果を報告します。

２階閲覧室内の図書46,732冊と書庫内資料の一部10,573冊について点検した結果、今年度52冊（昨年度は55冊）の紛失が確認されました。これで平成14年度からの累積紛失図書数は464冊になります。

あいかわらず授業・レポートでよく使われる図書が紛失しています。これらの紛失図書は毎年必ず利用が見込まれる図書なので再購入しなければなりません。その結果、何冊か新規購入ができなくなってしまいます。資料との新たな出会いが減ってしまうのはもったいないことです。

どの図書も府立大学の大事な図書ということを念頭において図書館を利用してください。

図書館お役立ち情報　　第2回　NII-REO編

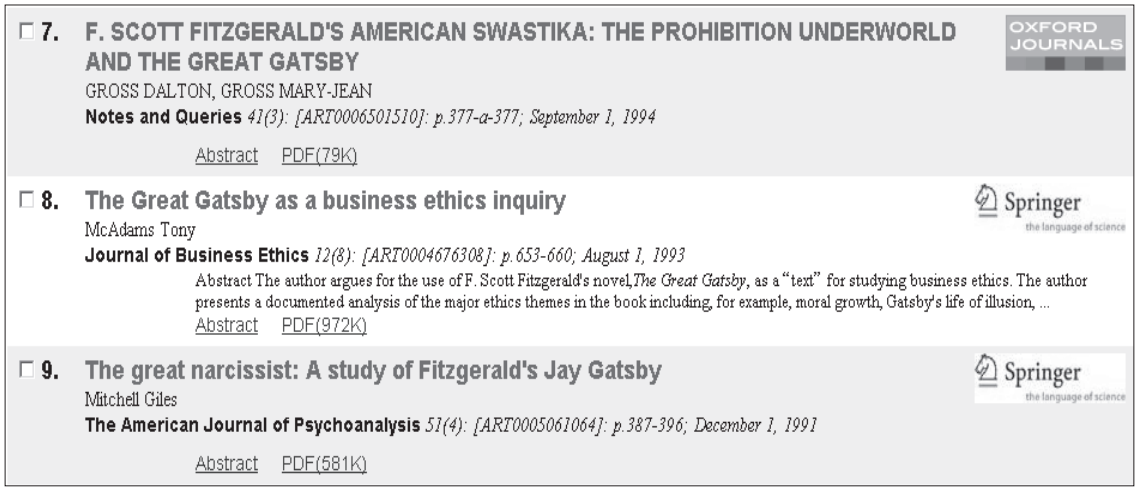
紙面の都合で第一回目から間が空いてしまいましたが、第二回目は NII 電子ジャーナルリポジトリ（NII-REO）（http://reo.nii.ac.jp/journal/HtmlIndicate/html/index.html）を紹介します。前回紹介した CiNii と同じく国立情報学研究所が公開していて、複数の海外電子ジャーナル　注１を横断的に検索し、書誌、抄録などは無料で閲覧できるようになっています。（本文閲覧は購読機関のみで学内 LAN に接続した PC から）

府立大学で本文閲覧可能なものは①と②です。（検索例をご覧ください。）

① Springer 社は大学で契約しているので、NII-REO からより図書館ＨＰからの方が便利かもしれません。（学外アクセスを申請されると、自宅からでも利用できます。）

② Oxford University Press 社　1998－2003分は本文も閲覧できますので検索してみてください。

≪検索例≫　　Scott Fitzgerald と　The Great Gatsby で検索


7. F. SCOTT FITZGERALD'S AMERICAN SWASTIKA: THE PROHIBITION UNDERWORLD AND THE GREAT GATSBY
GROSS DALTON, GROSS MARY-JEAN
Notes and Queries 41(3): [ART0006501510]: p.377-a-377; September 1, 1994
Abstract　PDF(79K)

8. The Great Gatsby as a business ethics inquiry
McAdams Tony
Journal of Business Ethics 12(8): [ART0004676308]: p.653-660; August 1, 1993
Abstract The author argues for the use of F. Scott Fitzgerald's novel, The Great Gatsby, as a "text" for studying business ethics. The author presents a documented analysis of the major ethics themes in the book including, for example, moral growth, Gatsby's life of illusion, ...
Abstract　PDF(972K)

9. The great narcissist: A study of Fitzgerald's Jay Gatsby
Mitchell Giles
The American Journal of Psychoanalysis 51(4): [ART0005061064]: p.387-396; December 1, 1991
Abstract　PDF(581K)

使い方の詳細は NII-REO の検索マニュアルをご覧ください。

注1
収録コンテンツと閲覧可能範囲

出　版　社	タイトル数	収録年	書誌、抄録	論　文　本　文
① Springer 社	約 800 誌	1847-1996	○	購読機関のみ
（旧 Kluwer 社分）	約 500 誌	1997-2005	○	購読機関のみ
② Oxford University Press 社	約 150 誌	1998-2003	○	購読制限なし（学内 LAN からのみ可）
	約 140 誌	1849-1995	○	購読機関のみ
③ IEEE/CS 社	約　25 誌	1988-	○	購読機関のみ

’07 オープンキャンパス開催される

７月28日㈯、７月29日㈰の両日、京都府立大学オープンキャンパスが開催されました。全体では、高校生等1,731人、保護者等860人、合計2,591人が参加され、昨年度の2,377人から214人の増加でした。今年度は平成20年度からの学部・学科再編にあわせた各学部・学科のプログラムとなり、ガイダンスや「大学の授業を体験してみよう」と題する模擬授業、学科アラカルトなどが実施されました。

図書館は両日開館して参加者に利用いただきました。28日㈯ 224人（うち高校生等135人）、29日㈰ 527人（うち高校生等378人）の合計751人の方々が利用され、昨年度の496人より255人多い数となりました。

ひととおり閲覧室の様子を見て回られる高校生や保護者の方々が多いなかで、熱心に読書をする方々もみられました。また、保護者と一緒にパソコンで資料の検索をされた方や、兄姉である本学の学生さんと一緒に見学された方々もおられました。質問では、図書館の蔵書冊数とか、新しい図書の購入冊数といった内容が多かったと思います。閲覧室入口の新刊コーナーに足をとめる方も多くみられました。府立大学の学生さんも、両日で103人が利用されました。こうした催しによって多くの方の図書館に対する関心が深まり、おおいに利用していただくきっかけになれば、と期待しています。

カレンダー

2007年10月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

【10/1（月）～通常貸出実施（貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内）】
【10/8（月）〈体育の日〉】
【～10/9（火）夏休み長期貸出返却期限】

2007年11月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

【11/1（木）～通常貸出実施（貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内）】
【11/3（土）〈文化の日〉、11/5（月）〈本学創立記念日〉、11/23（金）〈勤労感謝の日〉】
【11/9（金）〈六公立戦〉11/22（木）〈推薦入試〉】

2007年12月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

【12/3（月）～12/10（月）通常貸出実施（貸出冊数6冊以内、返却期限2週間以内）】
【12/23（日）〈天皇誕生日〉12/24（月）〈振替休日〉】【12/11（火）～12/27（木）冬休み長期貸出実施（貸出冊数6冊以内、返却期限:～1/18（金）】【12/28（金）～1/4（金）年末年始休館】

開館時間等		
通常開館	9：00－20：00	
……	*全学休講日* 11/9、11/22　9:00～16:45	*冬期休業* 12/25～1/8　9:00～16:45
休館日	土・日・祝祭日・年末年始	

なからぎ 京都府立大学図書館報　181 号 2007（平成 19）年 10 月発行　編集発行人：上田純一
発行所：京都府立大学附属図書館　〒 606－8522 京都市左京区下鴨半木町　TEL 075（703）5129
FAX 075（703）5192　ホームページ http://cocktail.kpu.ac.jp/toshokan/toshokan.html